

令和 6 年 6 月 18 日現在

機関番号：12611

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2021～2023

課題番号：21K19945

研究課題名（和文）新ウィーン楽派の後期十二音作品における作曲的思考法の変遷

研究課題名（英文）The Transformation of Compositional Thought in the Late Twelve-Tone Works of the New Viennese School

研究代表者

浅井 佑太 (Asai, Yuta)

お茶の水女子大学・基幹研究院・助教

研究者番号：80908369

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、新ウィーン楽派の作曲家、特にアントン・ウェーベルンの作曲プロセスに焦点を当て、彼の独特な作曲的思考法を解明した。その際、ウェーベルンが用いた十二音技法の使用法とその創作プロセスの詳細を、彼のスケッチや草稿を通じて詳細に分析することによって、この問題へのアプローチを行なった。特に彼の《弦楽四重奏曲》作品28における創作過程を重点的に検討し、彼の音楽的着想が具体的な楽想よりも抽象的なコンセプトに基づいていることを明らかにした。この研究は、彼の音楽的独自性の根底にある創造性を理解するための新たな視点を提供することができたと考えている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

この研究の学術的意義は、新ウィーン楽派の中心的な作曲家であるアントン・ウェーベルンの作曲プロセスと作曲的思考法を、実証的に解明できたことにあり、これは世界的にも類例が少ない実績である。ウェーベルンの十二音技法の具体的な適用方法や創作プロセスが、彼の音楽的着想が具体的な楽想よりも抽象的なコンセプトに基づいていることを明らかにした。この発見は、従来の楽曲分析では見過ごされがちだったウェーベルンの創作方法の独自性を浮き彫りにし、20世紀音楽の理解に新たな視点を提供している。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on the compositional process of New Viennese School composer Anton Webern, aiming to elucidate his unique compositional thinking. By thoroughly analyzing Webern's application of the twelve-tone technique and the details of his creative process through his sketches and drafts, the study approaches this issue comprehensively. Particular attention is given to the compositional process of his String Quartet, Op. 28, revealing that his musical ideas are based more on abstract concepts than concrete musical themes. This research provides a new perspective for understanding the creativity underlying Webern's musical uniqueness.

研究分野：音楽学

キーワード：音楽学 十二音技法 新ウィーン楽派

1. 研究開始当初の背景

新ウィーン楽派の名のもとにまとめられる3人の作曲家 アーノルト・シェーンベルク (1874-1951)、アントン・ウェーベルン (1883-1945)、アルバン・ベルク (1885-1935) の三者は、20世紀前半を代表する作曲家であり、第二次世界大戦後の現代音楽に極めて大きな影響を与えたことでもよく知られている。

こうした彼らの歴史的意義の大きさは、当然ながら、研究史においても繰り返し強調されており、彼らの音楽作品そのものに関する研究は数多く存在する。いくらか単純化していえば、これらの研究の大部分は出版された「楽譜・作品＝テキスト」を考察の対象とし、その楽曲分析を通して、この3人の作曲家の作曲語法や個々の作品の中で表現されているものを明らかにすることを目的とするものである。

その一方で、1970年代以降から、「楽譜/作品＝テキスト」ではなく、むしろ未出版の草稿やスケッチをもとに、作曲プロセス・創作の過程を解き明かすことを主眼とする研究が徐々に増えてきた。とりわけ、20世紀後半の音楽に最大の影響を与えたといっても過言ではない「十二音技法」が、どのように生み出されたのかという問題に関する関心は非常に強く、シェーンベルクの最初期の十二音作品である《ピアノのための組曲》作品25 (1921-1923) のスケッチ研究などを通して、この問題には多くの研究者たちがアプローチしている。

研究代表者がこれまでに行ってきた研究も基本的にはこうした路線に連なるものであり、その中でも特に重要なものを挙げるならば、シェーンベルクの高弟であるアントン・ウェーベルンがどのように十二音技法を受容し、自らの作曲技法として消化したのか、という問題に関しての考察を進めてきた。具体的にいえば、1921～1926年頃に書かれた彼のスケッチ資料を主な研究対象として、こうしたスケッチ資料の中でどのように、ウェーベルンが数々の試行錯誤を通して、十二音技法を試みてきたのかを実証的に示すことを試みたのである。

2. 研究の目的

本研究は、こうした先行研究の蓄積、および自らの過去の研究を踏まえつつ、スケッチ・草稿研究の射程をさらに押し広げようとするものである。すでに述べたように、シェーンベルク、ウェーベルン、ベルクの三者は、1920年代以降「十二音技法」と呼ばれる作曲技法を使用し、それがのちの世代の作曲家たちに与えた影響は計り知れないほど大きなものである。しかし注意しなければならないのは、一概に「新ウィーン楽派」「十二音技法」といっても、実際のところは、この三人の音楽・作風には極めて大きな隔りがあるという点である。その最大の理由のひとつは、彼らが同じ「十二音技法」という共通言語を使用しながらも、それぞれがまったく異なる創作プロセスを採用していたことにある。そして、それは単なる「仕事の手順」の差ではなく、三者の根本的な「音楽的思考法」の差異を反映するものであったと考えられる。

つまり本研究がとりわけアプローチしようとするのは、多くの先行研究が問題としていたような単なる「作曲プロセス」の再構成ではなく、むしろその作曲プロセスの背後にある「作曲的思考法」であり、これを可能な限り実証的に明らかにすることなのである。そして、この「作曲的思考法」の差を通して、シェーンベルク、ウェーベルン、ベルクの作曲語法・音楽の差の根本的な原因を探ることを試みるのである。

3. 研究の方法

すでに述べてきたように、本研究が主な考察の対象とするのは、「楽譜・作品＝テキスト」ではなく、むしろその作曲過程で生じたスケッチや草稿の数々である。これらのスケッチの大部分は、ドイツ・スイスに点在するアーカイブに所蔵されており、一般には公開されていない。それゆえ、アーカイブにおける自筆譜資料の調査をもとにして、前述した三者の作曲プロセスおよび思考法を考察する。

主に次のアーカイブで、この三人の作曲家のスケッチ・草稿資料は閲覧することができる。

- 1) シェーンベルク シェーンベルク・センター (ウィーン)
- 2) ウェーベルン パウル・ザッハー財団 (バーゼル)
- 3) ベルク ウィーン国立図書館 (ウィーン)

本研究ではこの中でもウィーンのシェーンベルク・センター内の資料とパウル・ザッハー財団で収集した資料をもとに研究を行なった。とりわけ、パウル・ザッハー財団で収集したウェーベルンの総計400ページを超えるスケッチブックは、彼の創作プロセスを極めて詳細に記録している。資料を収集する過程において、《弦楽四重奏曲》作品28 (1938) のスケッチ資料は、この作曲家の創作プロセスおよび作曲的思考法の特殊性を極めて明瞭に示していることが確認されたため、特に重点をおいて検討することにした。

具体的には、この《弦楽四重奏曲》スケッチをもとにして、まずその創作プロセスを再構成した。その際、次の問題について詳細に検討した。1) 最初の音楽的着想がどのように生じたか？

2) どのように「最初の着想」が「作品」へと発展していったか? 3) その過程で、どのような作曲の問題にどのように対処しようとしたのか?

その後、こうして得られた結果を、シェーンベルクおよびバルトークの作曲プロセスと比較し、ウェーベルンの創作プロセスと作曲的思考法の特殊性を浮き彫りにした。当初の研究予定であったベルクではなく、ハンガリーの作曲家バルトークを比較対象としたのは次の理由による。研究の過程で研究代表者は、バルトークの自筆譜資料研究者とともに、音楽学会内でパネルを企画した。その際に得られた研究上の交流から、バルトークの創作プロセスについての知見を得、それがウェーベルンの創作プロセスと興味深い共通点を持つことに気づかされたためである。

4. 研究成果

(1) 主な成果

先述した通り、とりわけウェーベルンの《弦楽四重奏曲》の作曲プロセスを考察の対象とし、そこから彼の作曲的思考法を推測することを試みた。

その際、この楽曲の第3楽章冒頭小節の作曲過程を特に重点的に検証した。というのも、興味深いことに、ウェーベルンはこの曲の冒頭の構想を練るためだけに7ヶ月以上を費やしている。パーゼルのパウル・ザッハー財団に保存されている彼の4冊目のスケッチブックは、この膨大なプロセスを詳細に記録しており、彼の創作の道程について貴重な洞察を与えてくれる。本研究では、ウェーベルンのスケッチを通して、この冒頭の小節が発展していく過程を探り、それを通して従来の作曲とは一線を画す彼独自の思考プロセスを明らかにした。

要点をかいつまんで書けば、ウェーベルンの作曲プロセスおよび思考法の特殊性は次の点に求められる。まず彼の作曲においては「シンメトリー」のような具体的な音高・リズムに結びつかない抽象的なコンセプトが着想の中心となる。この抽象的なコンセプトと適合するようなフレーズを、ウェーベルンは数多くスケッチし、それを実際にピアノで試し弾きしながら、どれが最も相応しいかを考えていたと思われる。

さらにそうして得られたフレーズを、次にカノンとして作曲する。この段階においても、ウェーベルンはスケッチブックの中で、さまざまな音列の組み合わせを大量にスケッチし、どの音列の組み合わせによるカノンが最も納得のいく音楽となるかを作曲しながら考えていることが確認できる。すなわち概してウェーベルンは頭の中に鳴り響いている音楽を記譜しているのではなく、「シンメトリー」や「カノン」といったそれ自体では具体的な音高やリズムと結びつかない抽象的なコンセプトに沿ってさまざまなフレーズ/楽想を作曲し、それを事後的にピアノで鳴らすことで、どれが最も納得のいく解答であるかを判断しているのである。

この作曲プロセスと作曲的思考法は、19世紀の大作曲家たちが試みていたような発想とは全く異なり、そこにウェーベルンの作曲の新しさの原因の一つを見出すことができる。このことに関しては詳細にまとめたのち、ドイツの学術誌に論文を投稿し、すでに受理・掲載されている。

この研究に引き続き、ウェーベルンの今述べた作曲手法と彼の師匠であるシェーンベルクの作曲手法を比較検討した。ここでは同じ十二音技法を使用した作曲においても、シェーンベルクが比較的伝統的な作曲プロセスをとっていたことが確認でき、ウェーベルンの特殊性がさらに際立つ結果となった。両者の十二音技法に大きな差があることは、ここに原因が求められるだろう。

とりわけこの背景には、作曲の際に原則として、ピアノを使用するか/頭の中で作曲するか、という違いが存在すると考えられる。ピアノを使用せずに頭の中で作曲することを弟子たちにシェーンベルクは求め、自らもそのように作曲していた。対して、ウェーベルンは少なくとも1920年ごろ、まだ十二音技法を採用する以前の段階から、ピアノを使用して作曲することを常としていたことが確認された。ここに両者の根本的な作曲プロセスおよび思考法についての差が存在すると考える。このことについては詳細にまとめたのち、国内の学術誌に投稿し、受理・掲載された。

こうした研究に加え、ウェーベルンとバルトークの作曲プロセスの比較も行った。シェーンベルクとウェーベルンの間には大きく異なる作曲プロセスが確認できたのとは対照的に、ウェーベルンとバルトークの間にはいくつかの興味深い共通点が見つかった。具体的には、両者は共に、音楽的着想が具体的な楽想というよりは、一種の抽象的なコンセプトへと変化しており、それが大きな枠組みとして作曲を導く反面、伝統的な意味での主題に属する音高やリズムの意義が低下していることである。このことについてもすでに論文を執筆し、国内の学術誌に投稿・受理された(現時点ではまだ未出版)。

(2) 国内外における位置付けとインパクト

上述のウェーベルンの《弦楽四重奏曲》に関する論文は、ドイツの主要な学術誌に掲載されたこともあり、国際的にも影響力を持ちうるのではないかと考えている。とりわけ作曲プロセスに関する一次資料研究は、国内外でも盛り上がりを見せており、そうした文脈の中で新しい知見を提供できたのではないかと考えている。

とはいえ、一本の論文が持ちうるインパクトがどの程度であるかは、結局のところ長期的に考えるべきものだと思っているし、それは当然のことであるというのが学術研究における原則であるとも信じている。そういうわけで、研究代表者本人としては大きなインパクトがあると信じ

ているが、具体的にどのようなインパクトを持つかについては10年、20年単位で待ってみないとわからないのではないかと思う。逆にいえば、10年後、20年後にも参照されるだけの価値を持つ研究成果を残すことができたと考えているし、そのように期待している。

(3) 今後の展望

ウェーベルンの作曲プロセスに関する研究については一つの区切りをつけることができたと思う。今後は、シェーンベルクおよびベルクの作曲プロセスについて、さらには彼らの次の世代であるヒンデミットら1920年代に活躍した若手作曲家の研究も行いたいと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 浅井佑太	4. 巻 121
2. 論文標題 脳裏に音楽が鳴り響くということ	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 人文学報	6. 最初と最後の頁 71-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 浅井佑太	4. 巻 24
2. 論文標題 20世紀「新音楽」における作曲コンセプトと創作プロセスの関係 バルトーク《マイクロコスモス》 第141番 イメージと反映 とウェーベルン《弦楽四重奏》作品28の比較を通して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 お茶の水音楽論集	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yuta Asai	4. 巻 80
2. 論文標題 Anton Webern und abstrakte Gesetzmässigkeiten. Zum kompositorischen Prozess des dritten Satzes seines Streichquartetts op. 28	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Archiv fuer Musikwissenschaft	6. 最初と最後の頁 151-166
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 浅井佑太
2. 発表標題 大作曲家はどうやって名曲をつかったか 草稿研究が教えてくれるもの
3. 学会等名 人文研アカデミー（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 浅井佑太
2. 発表標題 批判校訂全集からみるバルトーク研究の現在 『ミクロコスモス』合評を中心に
3. 学会等名 第72回音楽学会全国大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計2件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------